共同作業経験が無意図的同調行動の増加に及ぼす効果の検討

吉野　智朗

＜問題と目的＞

共感性はカウンセリングにおいて重要な要素である．しかしながら，共感性研究の主流は多次元的概念として捉えられており，運動的模倣のような身体を通した共感性の概念が疎かにされていることが問題である．人間は新生児から模倣ができるような生得的なメカニズムをもっていると論じてられている（Hoffman，2000）．このメカニズムは模倣によって他者の感情を表現するばかりではなく，他者と情動的に相互に関わるための能力を備えているのである．したがって，認知的方略を媒介した共感ばかりではなく，身体的・情動的に相互的関わりといった能力も考慮しなくてはいけない．

ところで，同調傾向の研究が多く存在し（例えば，Chartrand & Bargh，1999），同調傾向は無意図的模倣と考えられている．無意図的模倣は身体動作を通して他者と情動を共有するメカニズムであるため，認知的要素の共感性（役割取得能力）によって影響されるという結果（Chartrand & Bargh，1999）には疑問を抱く．そこで本研究は，同調傾向を促進する要因として相互的なやりとりが影響しているかどうかを検討することとする．また，共感性について多次元的共感性ばかりではなく，同時に身体的・無意図的な共感を考察し，共感のメカニズムについて追及を行う．

＜方　法＞

研究Ⅰ；研究協力者24組48名（共同作業群12組と統制群12組）．共同作業群は，共同作業課題（特殊クロスワード）と同調傾向測定課題（ジェンガ）が行われた．統制群は，個人作業課題と同調傾向測定課題（ジェンガ）が行われた．課題場面をビデオ録画し，共同作業課題の行動カテゴリーは「互恵性」と「非互恵性」，同調傾向測定課題の行動カテゴリーは「笑い」と「身体動作」として，行動分析を行った．

研究Ⅱ；研究協力者51名．インタビュー場面を用いて同調傾向を測定した．インタビューでは，研究協力者の答えに対してインタビュアーはうなずきを行った．インタビュー後研究協力者は多次元性共感性尺度（登張，2003）を回答した．インタビュー場面を録画し，インタビューでの行動カテゴリーは「うなずき」として行動分析を行った．

＜結果と考察＞

研究Ⅰ；共同作業を経験する共同作業群と共同作業経験を行わない統制群を比較し，共同作業群において共同作業時の互恵的やりとりが同調傾向の回数に関係があるかどうかを検討した．その結果，共同作業群と統制群の同調傾向の比較と，共同作業課題のやりとりと同調傾向の分析から，共同作業時の互恵的やりとりが同調傾向の増加に効果があることが分かった．

研究Ⅱ；同調傾向の回数と多次元性共感性尺度の得点の相関関係と，気持ちの想像（役割取得に対応）が同調傾向に影響を与えているかどうかの検討を行ったところ，同調傾向と多次元的共感性尺度は関係がなかった．

認知的方略を媒介した共感性の重要性は大きいが，一方で共感は幅広い概念である．模倣は新生児から可能で，受け身ではなく乳児が積極的に関わろうとするものである．身体的な共感と認知的な共感は本研究の結果から異なった概念であることが示唆された．共感性の定義は，認知的媒介を用いた共感性だけでなく，情動を共有し情動を交換し合うといった共感性を捉える必要があると考える．共感性を両側面から捉えることは，カウンセリングにおいてもカウンセラーはクライエントの感情を共感的に理解し，共有していることが示唆された．